

【旧約聖書日課】ヨシュア記 2章1～14節

1ヌンの子ヨシュアは二人の斥候をシティムからひそかに送り出し、「行って、エリコとその周辺を探れ」と命じた。二人は行って、ラハブという遊女の家に入り、そこに泊まった。2ところが、エリコの王に、「今夜、イスラエルの何者かがこの辺りを探るために忍び込んで来ました」と告げる者があったので、3王は人を遣わしてラハブに命じた。「お前のところに来て、家に入り込んだ者を引き渡せ。彼らはこの辺りを探りに来たのだ。」4女は、急いで二人をかくまい、こう答えた。

「確かに、その人たちはわたしのところにきましたが、わたしはその人たちがどこから来たのか知りませんでした。5日が暮れて城門が閉まるころ、その人たちは出て行きましたが、どこへ行ったのか分かりません。急いで追いかけたら、あるいは追いつけるかもしれません。」

6彼女は二人を屋上に連れて行き、そこに積んであった亜麻の束の中に隠していたが、7追っ手は二人を求めてヨルダン川に通じる道を渡し場まで行った。城門は、追っ手が出て行くとすぐに閉じられた。

8二人がまだ寝てしまわないうちに、ラハブは屋上に上って来て、9言った。「主がこの土地をあなたたちに与えられたこと、またそのことで、わたしたちが恐怖に襲われ、この辺りの住民は皆、おじけづいていることを、わたしは知っています。10あなたたちがエジプトを出たとき、あなたたちのために、主が葦の海の水を干上がらせたことや、あなたたちがヨルダン川の向こうのアモリ人の二人の王に対してしたこと、すなわち、シホンとオグを滅ぼし尽くしたことを、わたしたちは聞いています。11それを聞いたとき、わたしたちの心は挫け、もはやあなたたちに立ち向かおうとする者は一人もおりません。あなたたちの神、主こそ、上は天、下は地に至るまで神であられるからです。」

12わたしはあなたたちに誠意を示したのですから、あなたたちも、わたし一族に誠意を示す、と今、主の前でわたしに誓ってください。そして、確かな証拠をください。13父も母も、兄弟姉妹も、更に彼らに連なるすべての者たちも生かし、わたしたちの命を死から救ってください。」

14二人は彼女に答えた。

「あなたたちのために、我々の命をかけよう。もし、我々のことをだれにも漏らさないなら、主がこの土地を我々に与えられるとき、あなたに誠意と真実を示そう。」

【使徒書日課】フィリピの信徒への手紙 4章1～3節

¹だから、わたしが愛し、慕っている兄弟たち、わたしの喜びであり、冠である愛する人たち、このように主によってしっかりと立ちなさい。

²わたしはエボディアに勧め、またシンティケに勧めます。主において同じ思いを抱きなさい。³なお、**真実の協力者よ**、あなたにもお願いします。この二人の婦人を支えてあげてください。二人は、**命の書に名を記されているクレメンス**や他の協力者たちと力を合わせて、福音のためにわたしと共に戦ってくれたのです。

【福音書日課】ルカによる福音書 8章1～3節

¹すぐその後、イエスは神の国を宣べ伝え、その福音を告げ知らせながら、町や村を巡って旅を続けられた。十二人も一緒だった。²悪霊を追い出して病気をいやしていただいた何人かの婦人たち、すなわち、七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリア、³ヘロデの家令クザの妻ヨハナ、それにスサンナ、そのほか多くの婦人たちも一緒であった。彼女たちは、自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた。

「愛する人たち！」【こども説教のために】

今日は、まず皆さんに呼びかけたいと思います、「愛する皆さん」と。こどもたちにも、大人の皆さんにも、教会員信者の皆さんにも、そうでない方々にも、初めての人にも、わたしは呼びかけます、「愛する皆さん」と。日曜日の教会においでになられた皆さん一人ひとりに、それぞれ、「愛する〇〇さん」と呼びかけることはなくても、共に一つに集められた礼拝では、皆さんに向けて呼びかけたいのです、「愛する皆さん」と。

使徒パウロが、歩みを始めてまもない教会で、そこに連なるようになった人たちに向けて、呼びかけたのです、「**わたしが愛し、慕っている皆さん。わたしの喜びであり、冠である愛する皆さん**」と。パウロだけではなかったはずで、弟子たちの教会で、いつの頃からか、互いに呼びかけるようになりました、「愛する皆さん」と。

それは、もちろん、主イエスがお教えくださったことを憶えていたからでしょう、「互いに愛し合いなさい」と。「主なる神を愛し、隣人を自分のように愛しなさい」と。

お互いのことをよく知らなくても、わたしたちは、主イエス・キリストの名の掲げられた教会に集められてきて、主イエスの父である神の御前に共に立つようにされました。それで十分なのです、互いに「愛する皆さん」と呼び合うためには。愛しているからではありません。愛するために、愛を始めるために、ここで出会わされたから、「愛する人」と呼び合うのです。

だれと一緒に？

先週、教会員 K 姉の葬儀を執り行いました。礼拝に出席されなくなつてすでに十年が経っていらつしやつたこともあり、ご家族の意向で、わたしが斎場に出向いてご身内だけの式を執り行うこととなりましたので、教会の皆さんには、詳しいご案内をしませんでした。他教会から転入されて以来、35 年間、石神井教会員でしたから、このたびの葬りの営みに伴えなかつたことを残念に思われた方もいらつしやつたのではないかと思います。

かつて K 姉が教会報「あゆみ」に「転入会に際して」と題して寄稿して下さつた文章が残されています。K 姉は、キリスト教学校の高校に進まれ、大学進学後も無教会の聖書研究会などで聖書に親しまれていましたが、教会に通うことはなかつたそうです。ところが、ご長女がキリスト教学校に進まれたことがきっかけとなって、ご自身、教会に通われるようになり、六年の求道生活を経て洗礼を受けるに至られたのです。

聖書に親しまれながら教会に通うことのなかつた K 姉が、教会に連なり、洗礼を受けて信者の交わりにも加わるようになられるまでに、何が起こっていらしたのでしょうか。ご本人は、そのことをただ、「聖書の教えが単に知識としてでなく生きた福音として、頭だけでなく体全体で理解でき信じられるようになってきました」とだけ記されていました。これだけの手掛かりで、何か K 姉の本心について、代わって何か申し上げることはできないでしょう。それでも、わたしは、教会に通われるようになられたことで、K 姉が、キリストの教えに従って実際に生き、また交わりを続けようとしている人々と出会われた、ということは言えるのではないかと思います。

わたしは、両親が信者の家庭に生まれ育ちました。物心ついた時から教会の交わりの中に置かれていたのです。子どものころから聖書は読んでいましたが、教理を教え込むような教会ではなかつたので、どのような解釈をしても、正されたり、批判されたりすることは一切ありませんでした。いわゆる教理や神学を体系的に理解するようになったのは、ようやく神学校に入ってからです。神学校に入り、牧師になることがなければ、わたしは、今でも、薄っぺらな「教理問答集」の一つもまともに答えられないままであつたかもしれません。わたしだけでなく、教会のほとんどの仲間が、そうだったと思います。それでも、教会で共に育つた多くの仲間が、今でも信者として教会生活を続けています。皆、自分の親だけではない、むしろ親以外の信仰者としての人生を重ねてきた多くの先輩たちと接する機会を与えられ、彼らの交わりに招き入れられ、そこで、人生の生き方を見せられ、「この人たちと共に人生を歩みたい」と願うようになり、その道の先にいらつしやる主イエス・キリストと結ばれる洗礼へと導かれたのです。

主において同じ思い

主イエスがガリラヤ地方の町や村を巡って宣教旅行を続けていらしたとき、その旅に加わり、一緒に行く者たちがありました。「十二人」と呼ばれる弟子たちです。彼らは「使徒」と呼ばれるようになるほど、主イエスの近くに置かれていました。彼らは、教えられたり説明されたりする以上に、主イエスと寝食を共にすることで、生活の実践の中で、同じ思いを抱かされるようになっていったのでしょうか。彼らは、主イエスが最後、捕らえられ、十字架につけられ、死んで葬られるまでのすべてを共にするように、導かれました。そのすべてが、彼ら「使徒」と呼ばれるようになった者たちにとって、自身の生き方を方向づける指針となったのです。

それは、しかし、「十二人」だけのことではなかったでしょう。「使徒」と呼ばれなくても、「使徒」候補生は他にもいたのです。「**マグダラの女と呼ばれるマリア、ヘロデの家令クザの妻ヨハナ、それにスザンナ**」と名を挙げられた女性たちも、「使徒」と同じような歩みをしてきた者たちだったのでしよう。彼女たちは、ただ女性であるという理由で、「使徒」と呼ばれることはなかったのです。それでも彼女たちの名が挙げられているのは、彼女たちがまた、「使徒」たちと同じように、主イエスを知らなかった者を主イエスへと結びつけ、主イエスのご生涯によって方向づけられる生き方を、自身の生き方を通して伝える役割を果たした者たちだったからではないのでしょうか。

そのような者たちは、教会の歴史の中で、無数に数え上げられるでしょう。パウロが「フィリピの教会」に宛てて記した書簡の中で名を挙げている、**エポディア**や**シンティケ**という女性、また名の知られぬ「**真実の協力者**」や**クレメン**スなどです。この人たちと出会うことで、直接見ることのなかった主イエス・キリストに触れ、その生き方へと導かれ、その道に従うようになった者たちが、どれほどいたことでしょうか。

そこにあるのは、頭の中だけの教理でも、観念的な信心でもありません。主イエスから弟子へと受け継がれてきた、現に生き、死んでいく者の行く道、生き方に他ならないでしょう。人と出会い、共に歩む交わりを重ねることなしには決して得られない、生きた学びなのです。

この道が、信頼のおける道なのか、歪んだ道でないと言えるのか。わたしたちは、ただ、それが主イエス・キリストというお方において同じ思いであろうとすることによって、そう言えるのでしょうか。そう信じるのです。

そうであればこそ、わたしたちは、先達の名を挙げて記念するでしょう。出会った者を愛してくれた先達がいたのです。彼らに続いて、わたしたちもまた、新たな一人と出会い、一人を愛の交わりに迎える者となることができるようにと願って、そうするのです。